

津

端

亨

編

纂

現代短歌分類辭典

新裝判

36卷

現代短歌分類辞典

新装版 36 卷

通卷 1 9 4

平成六年 三月二十一日発行

定価一六、七〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒
345

埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五

電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番

振替 東京三一九三一二四

目次

目次

	歌数	頁数		歌数	頁数		歌数	頁数
とこ〔床〕	九	一	どこーまでもーも〔何処までも〕	五九	二八	どさくさ	二	四九
とこ〔何処〕	二九	一	とこや〔床屋〕	二二	三二	どさくさまざれ	一	五〇
とこ〔常〕	三	七	とこやみ〔常闇〕	一五	三二	とさす〔閉ざす〕	一四五	五〇
とこあげ〔床上げ〕	二	八	どこやら〔何処やら〕	二八	三二	とさす〔鎖す〕	一二	五四
とこう〔土工〕	三一	八	とこよ〔常世〕	五八	三二	とさつ〔屠殺〕	二	五四
とこう〔怒号〕	一〇	九	とこよさぶ〔常世さぶ〕	一	三四	とさつば〔屠殺場〕	七	五四
とこえ〔鋭声〕	四一	九	とこよのくに〔常世の国〕	九	三四	とさどさ	一	五四
とこか〔何処か〕	八六	一〇	とこよのさかい〔常世の境〕	一	三四	とさにっき〔土佐日記〕	一	五四
とこころ〔利心・鋭心〕	四七	二三	どころか	三	三五	とさみづき〔蠟燭花〕	七	五五
とこしえ〔永久〕	三三八	一四	ところがき〔所書き〕	一	三五	どさりと	二	五五
とこずれ〔床擦れ〕	一一	二二	ところがら〔所柄〕	一	三五	とさん〔登山〕	一八	五五
とこそこ〔何処其処〕	二	三二	ところしむ〔所占む〕	一	三五	とさんか〔登山家〕	六	五六
とことと	四	三二	ところずる〔野老〕	九	三五	とさんくつ〔登山靴〕	四	五六
どこーとーなく〔何処となく〕	四	三二	ところせまし〔所狭し〕	一	三五	とさんてんしや〔登山電車〕	五	五六
どことなく	四	三二	ところてん〔心太〕	一三	三五	とさんとうろ〔登山道路〕	二	五六
どこーとーもーなし〔何処ともなし〕	二	三二	ところてんぐさ〔心太草〕	四	三六	とさんぼう〔登山帽〕	三	五六
とことわ〔常とわ〕	七五	三三	ところどころ〔所所〕	二二	三六	とさんろ〔登山路〕	五	五六
とこなつ〔常夏〕	三五	二五	ところなし〔所無し〕	二八	四三	とし〔年〕	二〇二	五六
とこなめ〔常滑〕	一四	二六	とこわ〔常葉〕	一〇	四四	とし〔疾し〕	一	一一二
とこのま〔床の間〕	六四	二六	とこわか〔常若〕	三八	四四	とし〔都市〕	九六	一一二
とこぼしら〔床柱〕	二	二八	とき〔土佐〕	一一	四五	とし〔杜詩〕	九	一一五
とこはる〔常春〕	一〇	二八	ときか〔鶏冠〕	三五	四八	とし〔鋭し〕	四	一一六
とこぶし〔常節〕	一	二八	とさかのり〔鶏冠海苔〕	二	四九	とし〔敏し〕	一	一一六

とし〔徒事〕	一 一一六	としのせ〔年の瀬〕	五二 一三五	としわか〔年若〕	五四 一四四
とし〔徒爾〕	三 一二六	としのは〔年の端〕	五二 一三六	としん	一 一四六
とし〔刀自〕	二〇 一二六	としび〔都市美〕	一 一三七	としん〔都心〕	二九 一四六
とし〔途次〕	一 一二九	としひさに〔年久に〕	二二 一三七	としん〔妬心〕	四 一四七
としうえ〔年上〕	一〇 一二九	としへる〔年経る〕	八 一三七	とじん〔都塵〕	一 一四七
としおとこ〔年男〕	一 一二〇	としほぎぐさ〔年寿草〕	一 一三八	どじん〔土人〕	一五 一四七
としがい〔年甲斐〕	二 一二〇	としほぎまつ〔年祝松〕	一 一三八	とす〔賭す〕	一 一四八
としかさ〔年嵩〕	三 一二〇	としほぐ〔年寿ぐ・年祝ぐ〕	八 一三八	とす	三 一四八
とじきみ〔戸閨〕	一 一二〇	としま〔年増〕	五 一三八	とすか〔トスカニーニ〕	一 一四八
としけいかく〔都市計画〕	二 一二〇	としま〔利島〕	一一 一三八	どすとかふすき〔ドストエフスキ〕	四 一四八
としこ〔年子〕	一 一二〇	としまがおか〔豊島が岡〕	六 一三九	とせい〔渡世〕	二 一四八
としこし〔年越し〕	一〇 一二〇	どしゃ〔土砂〕	一七 一三九	どせい〔土星〕	五 一四八
としごと〔年毎〕	四六 一二二	どしゃぶり〔土砂降り〕	五 一三九	どせい〔怒声〕	三 一四九
としごろ〔年頃〕	三〇 一二二	としゅ〔徒手〕	一 一三九	とせんば〔渡船場〕	七 一四九
としした〔年下〕	五 一二三	としょ〔図書〕	七 一三九	とそ〔屠蘇〕	二七 一四九
としたつ〔年立つ〕	四一 一二三	とじょう〔涂上〕	九 一四〇	とぞ	一五七 一五〇
としま〔年玉〕	六 一二四	とじょう〔屠場〕	二 一四〇	とそう〔塗装〕	一五 一四四
どしつ〔土質〕	二 一二四	とじょう〔登場〕	二 一四〇	どそう〔土葬〕	四 一四五
としつき〔年月〕〔ねんげつ〕	一九五 一二四	どじょう〔泥鰌〕	三三 一四〇	どぞう〔土蔵〕	六四 一九五
としどし〔年年〕	一五二 一二〇	どじょう〔土壌〕	六 一四一	どそく〔土足〕	六 一九六
どしどし	二 一二四	としょうじ〔戸障子〕	一五 一四一	どぞく〔土俗〕	一 一九七
としなみ〔年波〕	八 一二四	としょかん〔図書館〕	五〇 一四二	とそさけ〔屠蘇の酒〕	一 一九七
としなみ〔年並み・年次〕	一 一二四	としよく〔徒食〕	二 一四三	どだい〔土台〕	七 一九七
としのいち〔年の市・歳の市〕	二 一二四	としより〔年寄〕	二二 一四四	とだち〔鳥立ち〕	一 一九七
としのうち〔年の内〕	五 一二五	としよわ〔年弱〕	一 一四四	どたどた	一 一九七
としのくれ〔年の暮れ〕	一〇 一二五	とぢる〔閉じる〕	二 一四四	とだな〔戸棚〕	一九 一九七

どたりと	一一九八	どっか〔何処か〕	二三二〇九	とっこうたい〔特攻隊〕	二二二
とたん〔途端〕	五一九八	とつかく〔突角〕	二二〇九	とっさ〔咄嗟〕	四二二
とたん〔塗炭〕	一一九八	どっかつ〔独活〕〔うど〕	六八二二〇	どっさり〔どっさり〕	一一二
とたん〔トタン〕	四七一九八	どっかと	二二二	とっしゅつ〔突出〕	八二二
どたん〔土壇〕	五二〇〇	どっかりと	一一二二	とっじょ〔突如〕	一三二二
とたんに〔途端に〕	四二〇〇	とつがわ〔十津川〕	一一二二	どっしり	九二二
どたんば〔土壇場〕	一一〇〇	とっかん〔呐喊〕	一一二二	とっしん〔突進〕	五二二
とたんやね〔トタン〕	一一〇〇	とくかん〔突貫〕	一一二二	とつぜん〔突然〕	四八二二
とち〔土地〕	一〇五二〇〇	とっき〔突起〕	二二二	とったん〔突端〕	一七二二四
どち〔共〕	三二〇三	どっき〔毒氣〕	四二二三	どっち〔何方〕	七二四
とちぎ〔栃木〕	一一〇三	とくきゅう〔特急〕	三二二三	とってい〔突堤〕	四二二五
とちぎけん〔栃木県〕	二二〇三	どっきょ〔独居〕	三二二三	とつても	一一二六
とちじ〔都知事〕	一一〇四	とつぐ〔嫁ぐ〕	七五二二四	どつと	六二六
とちのき〔橡の木・栃・七葉樹〕	六七二〇四	とつぐ〔疾つく〕	一一二六	とつとつ〔訥訥〕	六二六
どちゃく〔土着〕	二二〇六	どく〔ドック〕	一一二六	とつとつ〔咄咄〕	一一二六
とちゅう〔途中〕	二九二〇六	とつくに〔疾つくに〕	二二六	とつとり〔鳥取〕	九二六
どちゅう〔土中〕	三二〇七	とつくに〔外つ国〕	四六二二六	とつにゅう〔突入〕	一四二二七
とちゅうげしゃ〔途中下車〕	一一〇七	とつくり〔徳利〕	二六二二八	とつぱ〔突破〕	六二七
とちゅうき〔登頂記〕	一一〇七	とつげき〔突撃〕	三〇二二九	とつぱこう〔突破口〕	一一二七
とちゅう〔斗帳・戸帳〕	四二〇七	とつげきろ〔突撃路〕	四二二〇	とつぱな〔突端〕	一九二二七
どちら〔何方〕	九二〇七	とっけん〔特権〕	二二二〇	とつぷう〔突風〕	一五二二八
とつ	六二〇八	どくこ〔独古〕	四二二〇	とつぷり	四二二八
とつおい	八二〇八	どっこい	二二二〇	とつぷりと	一一二二九
とつおう〔凸凹〕	九二〇八	とくこう〔特効〕	一一二二	どつぽ〔独歩〕	一一二二九
とつか〔特価〕	四二〇八	とくこう〔特高〕	五二二	とつみや〔外つ宮〕	四二二九
とつか〔戸塚〕	六二〇九	とくこう〔特攻〕	一一二二	とつれんず〔凸レンズ〕	一一三〇

とて〔とて〕	五 三〇	とどろ〔轟〕〔とどろに〕	一五二 二六六	どば〔驚馬〕	一 一三二
とて〔土手〕	四五二 二三〇	とどろかす〔轟かす〕	一九 二七〇	どば〔鋭刃〕	六 三三二
とてい〔徒弟〕	一 二四二	とどろき〔轟き〕	四九 二七〇	とばあらし〔賭場荒らし〕	一 一三二
とても〔逆も〕	六八 二四二	とどろく〔轟く〕	三四 二八二	とはいえ〔とは言え〕	一 一三三
とてもかくても	五 二四五	とどろとどろ	三二 二九一	とばく〔賭博〕	五 三三三
とてら〔襦袍〕	一六 二四五	とない〔都内〕	一 二九二	どばし〔土橋〕	三八 三三三
とでん〔都電〕	一三 二四五	どなた〔何方〕	一 二九二	とばしる〔逆る〕	五 三三四
とでんと〔どでんと〕	一 二四六	どなべ〔土鍋〕	三 二九二	とばす〔飛ばす〕	五七 三三四
とど〔海馬〕	四 二四六	となり〔隣〕	三一 二九二	どはつ〔怒髪〕	一 一三六
どど	一一 二四六	となりぐみ〔隣組〕	一七 三〇一	とわのねむり〔永遠の眠〕	三 三三六
どどいつ〔都都逸〕	一 二四六	となりする〔隣する〕	二 三〇一	とばり〔帳・帷〕	六一 三三六
どどいて〔屈いて〕	一 二四七	となりべや〔隣室〕〔りんしつ〕	八九 三〇一	とはんみち〔登攀路〕	一 一三八
どとう〔徒党〕	一 二四七	となりや〔隣家〕	二七〇 三〇四	とび〔鳶・鴟・鴞〕	三三〇 三三八
どとう〔怒涛〕	二四 二四七	どなる〔怒鳴る〕	一 三一一	とひ〔徒費〕	二 三三七
どとく〔屈く〕	二四五 二四八	とにかく〔兎に角〕	二五 三一一	とひ〔土肥〕	一三 三三七
どとける〔屈ける〕	二七 二五五	とにかくに〔兎に角に〕	一六 三三二	とびあがり〔飛び上がり〕	二 三三七
どとこおり〔滞り〕	二二 二五五	とねりこ	四 三三三	とびあるく〔飛び歩く〕	二 三三七
どとこおる〔滞る〕	五七 二五六	とねがは〔利根川〕	八〇 三三三	とびあるく〔跳び歩く〕	一 一三七
どとのう〔調う〕	一〇一 二五八	とねり〔舍人〕	七 三三五	とびいし〔飛び石〕	五 三三七
どとのえる〔調える〕	八 二六一	どのが〔土囊〕	八 三三五	とびいり〔飛び入り〕	六 三三七
どどのおる〔整おる〕	一 二六一	とのぐもり〔との曇り〕	五 三三六	とびいろ〔鳶色〕	三 三三八
どどいつまり	三 二六一	とのぐもる〔との曇る〕	二八 三三七	とびうを〔飛魚〕	二 三三八
どどまつ〔榎松〕	二四 二六一	とのさま〔殿様〕	二 三三八	とびうつる〔飛び移る〕	二 三三八
どどまる〔止まる・留まる〕	一三二 二六二	とのさまがえる〔殿様蛙〕	四 三三八	とびおり〔飛び下り〕	二 三三八
どどめ〔土留め〕	一 二六五	どのみち〔何の道〕	一 三三八	とびおりる〔飛び下りる〕	二 三三九
どどめる〔止める・留める〕	二 二六五	とのも〔外の面〕	二八 三三八	とびおりる〔飛び降りる〕	一 三三九

とびかう〔飛び交う〕	四〇 三三九	とぶ〔跳ぶ〕	三三 三七〇	とぼしさ〔乏しさ〕	五三 三九一
とびかける〔飛び翔ける〕	一 三四〇	どぶ〔溝〕	一一四 三七〇	とほじろし〔とおじろし〕	五 三九三
とびぐち〔溝口〕	一 三四〇	どぶいた〔溝板〕	四 三七三	とほだのかわづ〔遠田蛙〕	一 三九三
とびこす〔飛び越す〕	二 三四〇	どぶがわ〔溝川〕	五九 三七三	とほつあふみ〔遠江〕	三 三九三
とびこみ〔飛び込み〕	二 三四〇	どぶくろ〔戸袋〕	九 三七五	とほつおや〔遠祖〕	一 三九三
とびこむ〔飛び込む〕	九 三四一	とふつ〔渡仏〕	二 三七五	とほつま〔遠夫〕	一 三九三
とびさる〔飛び去る〕	一六 三四一	どぶどぶ	一 三七五	とほとと	一 三九三
とびすがる〔飛び縫〕	一 三四一	とぶとり〔飛ぶ鳥〕	五 三七五	とほとと	二五 三九三
とびだす〔飛び出す〕	四 三四一	どぶねずみ〔溝鼠〕	一 三七六	とほなり〔遠鳴〕	一 三九四
とびたつ〔飛び立つ〕	八二 三四二	とぶらい〔弔い〕	二〇 三七六	とほに〔遠に〕	一 三九四
とびちがう〔飛び違う〕	二 三四四	とぶらう〔弔う〕	一二 三七六	とほのく〔遠退〕	一 三九四
とびちる〔飛び散る〕	一八 三四四	どぶろく〔濁酒〕	九 三七七	とほのながめ〔遠眺〕	一 三九五
とびつく〔飛びつく〕	一五 三四五	どぶんと	一 三七七	とほひと〔遠人〕	二 三九五
とびとびに〔飛び飛びに〕	三七 三四五	とべい〔渡米〕	二 三七七	とほまつかぜ〔遠松風〕	一 三九五
とびのり〔飛び乗り〕	三 三四六	どべい〔土塀〕	四一 三七七	とほやま〔遠山〕	一 三九五
とびのる〔飛び乗る〕	一 三四六	とばしり〔斗米〕	二 三七八	とほよ〔遠世〕	一 三九五
とびはねる〔飛び跳ねる〕	二 三四七	とべら〔海桐花〕	一三 三七八	とほらす〔通〕	一 三九五
とびひ〔飛び火〕	一 三四七	とほ〔徒歩〕	三五 三七九	とほりかぜ〔通風〕	一 三九五
とびまわる〔跳び回る〕	一 三四七	とほ〔杜甫〕	二七 三八〇	とほりすがふ〔通過〕	一 三九五
どひょう〔土俵〕	九 三四七	とおいかづいち〔遠雷〕	一三 三八一	とほる〔徹・透〕	一 三九五
どひょうぎわ〔土俵際〕	一 三四七	とほう〔途方〕	一 三八一	とほる〔遠居〕	一 三九五
とびら〔扉〕	三二 三四七	どぼく〔土木〕	一 三八一	とほりあめ〔とおりあめ〕	三 三九五
どびん〔土瓶〕	七 三五六	とおぐも〔遠雲〕	一 三八一	とほめ〔遠眼〕	一 三九六
とふ〔云ふ〕	二 三五六	とぼける〔恍ける・惚ける〕	一 三八二	とま〔苦〕	一一 三九六
とふ〔塵布〕	二 三五七	とぼし〔乏し〕	三六〇 三八二	とま〔土間〕	二四八 三九六
とぶ〔飛ぶ〕	四七九 三五七	とぼしい〔乏しい〕	四 三九一	とまこまい〔苦小牧〕	二 四〇三

とます〔富ます〕	一四〇三	とめど〔止処〕	六一四二七
とまと〔トマト〕	一三六四〇三	とめる〔止める〕	四四二九
とまどい〔戸惑い〕	一五四〇七	どめん〔土面〕	三四二九
とまどう〔戸惑う・途惑う〕	二四四〇八	とも〔友・朋〕	一一五九四二九
とまのふきがや〔苦の葺き萱〕	一四〇八		
とまや〔苦屋〕	一四四〇九	計	一五七一三首
とまりがけ〔泊まり掛け〕	一四〇九		
とまりぎ〔止まり木・留まり木〕	三四〇九		
とまる〔止まる〕	二五九四〇九		
とまる〔泊まる〕	二四二七		
とまる〔停まる〕	五四一七		
とまん〔停まる〕	五四一七		
とまんこう〔豆満江〕	一四一七		
どまんじゅう〔土饅頭〕	七四一七		
どまんなか〔ど真ん中〕	二四二七		
とみ〔富〕	二四四二七		
とみかうみ	一四一八		
とみたらふ〔富足〕	一四一八		
とめど〔留処〕	二四一八		
とみに〔頼に〕	二四四一八		
とみん〔都民〕	三四二五		
どみん〔土民〕	一一四二五		
とむ〔富む〕	二五四二五		
とむ〔尋む〕	四四二六		
とむらい〔弔い〕	二四二六		
とむらう〔弔う〕	一三四二六		
とめおく〔留め置く〕	二四二七		

とこ【名詞】〔続き〕

わが床を母にたたませ坐りつつかりそめならず我が言ふことは① 白水 吉次郎
 わが夢はたのしかりけり夜の床にひとりさめつつわびしみにけり 石川 まき子
 別るると握手したまひし事を一つ酔ひさめの床に思ひいづるも① 松田 常憲
 別れぎはに涙たたへし妻の顔思ひ出てひとりの床のべて寝る① 生 咲 義 郎
 忘らることよもあらじ床の上に胸ふさがりてねむられぬかも① 高田 浪 吉
 幼子の床一つ増えてこの夏は蚊帳つり手の釘打ち直す(新万葉集三) 栗林 久 司
 をさな児の百日咳に苦しむを夜床の上に見るは堪へずも⑥ 高田 浪 吉
 をさな子の湯婆をわが床に入れすでに夜更とわれも眠らな② 吉 野 秀 雄
 をさなごは床にめざめてうぐひすの朝の音色をまねてゐるかも 米 田 雄 郎

とこ【代】〔何処〕

「とこ」「どこ」の転である「いどこ」がさらに転じたもの。不定称の指示代名詞。①不明の場所やきまっけない場所などを指し示すのに用いる。②の場所。③所属しているところなどが不明、不定の時に用いる。④「どこも」「どこにも」「どこへも」などの形で、どのような所。いずれの場所。

仰ぎみる巖の肌ぬれて居りどこゆともなく雫たりつつ① 中 井 コツフ
 赤蜻蛉むらがり飛べどこのみづに卵うまねばかなしかりけり① 斎 藤 茂 吉
 わが足はスキーは何処に向きてをりやはと思ふまにつころび 大悟法 利 雄
 たる①

アカシヤの房なす花はどこにもあり葉隠りにしてやさしきものを

②

秋のもみぢ、口べにつけてどこへ行く、冬になつたら散つてしまふよ 吉 田 晴 美

堀内 通 孝

吉 田 晴 美

朱塗の春日大社に頭下ぐれどこの年にして願ぐこともなし⑦

朝一度ゆふべに一度どこにゆく今年必ず子は癒ゆるべし⑩

朝づく日桐の枯葉を照らせれどこの塀かげの霜まだとけず

朝となり夕となりて過しかどこの幾日の忘らるべしや④

味のない東京になっちゃったなア どこ見ても 灰色の屋根灰色

の空①

あたたかい酒売る店がどこにあるつめた私をあたためる酒を⑤

新しい鯛の刺身だ。昼飯だ。おやあの鶯の声はどこだらう。③

あたらしくおのれ生きむと幾度か心きほへどこの身おとろふ②

油蟬秋ふかれどこの里になほいのち生きてぢちと鳴きをり

天漢眺めたりしが幾日前に何処へ往きたる時か忘れぬ⑦

(現代短歌大系)

雨あがる夕べの寒さ何処よりか日影洩れ来ぬ襖の上に①

(馬鈴薯の花)

雨そぞく窓より見ゆる竹の葉に青虫のをりどこより来しか⑦

歩きながら呟く癖がつき、ほんたうの私はどこにも居なくなった

①(現代短歌大系)

あるときはどこ吹く風とききながす心いつはりていふこともあり

④

青々としげる蜜柑の山ふかしどこに人居るかこゑもきこえぬ①

青草を雨はひたせどこの岡の桜はいまだ散るけはひなく⑤

安住はどこにもなしと酔さめに澄む青手の眸を愛すなり②

岡 野 直七郎

松 村 英 一

小田切 浪 彦

山 下 陸 奥

後 藤 史 郎

西 村 陽 吉

矢 代 東 村

柴 生 田 稔

下 村 海 南

尾 山 篤 二郎

島 木 赤 彦

長谷川 銀 作

葉 山 耕 三郎

谷 鼎

荒 木 暢 夫

吉 野 秀 雄

井戸川 美和子

いかさまに経しやと問へどこの人や眉^{まゆ}顰^{しん}ましめ触れては云はぬ
生きてゐることそれすらも荷になりて救ひをどこに求めたものか
いきれたつ草むらに伏して思ふこと次の機関銃陣地を何処に決め
む(支那事変戦地)

窪田 空穂
津端 修
伊藤 祐共

何処まで流れ行くらむ離かり行く燈籠の灯にふと湧くさびしさ

高橋 城司

何処まで伸ぶる花穂ぞ竜舌蘭海風まとの明るさになれて①

荒木 暢夫

伊豆相模駿河甲斐武蔵安房上総下総常陸あと一州はどこか③

花岡 謙二

一山を鳴りどよもせし風の今どこにかくれし一穂のそよぎ②

桐田 蔭村

いつどこで死んでも心残りないまでになるのは何年の後

津端 修

いつどこで墨汁をかも舐めて来しいたちの口はまつ黒の口③

岡本 大無

何時どこでどうして染まるものならん濃緑に淀むこの淵の色①

萱沼 利子

いつどこに思ひがけない禍がくるかも知れぬ怖ろしさをおもふ④

西村 陽吉

いつどこをどう掘ってもかまはないそれだけの土がある私の庭⑤

小宮 良太郎

いなめの明けゆく空の三日の月吾子よ何処にありと思はむ①

築地 藤子

(新万葉集五)

今自身が何処にゐるといふことを知らないものはおれ達ばかりか

土岐 善麿

⑫

今のわが年には何処にいまししか何しまししか亡き父はもよ⑥

松村 英一

入替の機関車の煙なびくのみ駅の向うのどこに火事がある④

長谷川 銀作

(現代短歌全集)

春ける彼岸秋陽に狐ばな赤赤そまれりここはどこのみち

木下 利玄

鬱屈の父の面影どこにもなく祖国留学の青年筋骨置きし⑦

四賀 光子

梅匂ふ王禅寺の空何処よりも青く見えつつ雲の幾ひら

(多磨三・多磨四)

高島 規方

越後にはどこにも幾らも良寛がありさてこの良寛のこの字が読め
ない⑤

小宮 良太郎

老いてなほ匡しがたきを悲しめどこのまま行かん「い」「え」の

宮 柊二

訛⑧

大きなことを云ひをりどこ押せばその音が出るとなぐさみに聞

津端 修

く

大空の華麗をしばしわれのいへどこの国に住みて人の忘れたる④

吉植 庄亮

大雪を境に庭に来ずなりし雀らはどこにあさりてをらむ④

相良 義重

幼子を一途にあやす宵にして心のどこに妻があるのか①

千代 国一

おさるれば何処までもへこみ終るときこの雑沓のわが腹あはれ

土岐 善麿

⑥

落葉吹く夕の風にことよせん「何所より来て行くや何所へ」

堀口 大学

追はれ追はれて鴉らはどこに生きゐるやはかなきことを時の間思

山崎 一郎

ふ②

追ひ行かば何処の隈かにいかれてある如も吾子をおもほゆるか

木下 利玄

も②

大きな瓶のどこよりか水の洩るるごとく思はれて一夜われはねむら

阿澄 一三

ず(新万葉集一)

大寺は焼け失せたれどこの山の谷間に咲けり白梅の花⑤

岡野 直七郎

おやおすうちやん おめかししてどこゆくの あたし! と母の

後藤 史郎

背から 二十歳の様な眼で笑ひます

凡その妥協を否むところ吾が古りし身体のどこに凝れる③
かひがひしき女の歩み養濡れて朝雨に行くどこも坂道⑤
会社の帰りどこへゆく興味もない「番町会を暴く」を買って電車
へのる⑥

千代国一
植松寿樹
西村陽吉

角帽など被らぬ大学が一つ位ありてよからむ何処にかなきや⑤

西田嵐翠

掛けて居る眼鏡をどこにやりしぞと訝り捜しふと笑ひ出づ③

川浪磐根

火口壁をめぐりつつどこにわれ立つも霧吹きあげ来低きかたより

橋本徳寿

かたくなは君にも負けぬわれと思へどこのかたくなを捨てがてに

中沢庭柯

する③

かはたれの駅に灯をつけ止まり居るこの夕汽車は何処に行くらむ

中村憲吉

②

かへり来て病む児に見する絵葉書の東京名所はどこも行かざりき

鈴江幸太郎

①

花瓣は四枚しかなかった。あとの一枚は不思議に、どこを探して

宮崎一夫

もみつからなかつた(現代短歌大系)

辛うじて吾が子三人を育くむとこの満洲のどこに住み良けむ②

山本友一

乾きたる冬の大路の何処やらむ石炭酸のにはひひそめり①

石川啄木

湖越しに餐庭高原何処よりも青く見えつつ雲切れにけり⑧

尾山篤二郎

気軽にながものいへどこの兵達膝もくづさずうけこたへする①

小宮良太郎

技巧だけ勝って実のないこの歌どこに取柄があるといふのか

津端修

気づかざる者は気づかず何らかの形で何処にもある暴力に⑤

西田嵐翠

黄に透ける桑畑き若葉明るくて幸ひはどこにもあると思ひぬ②

斎藤喜博

きのふまで梢にあった白い花枝頭を辞してどこへ行ったか④
君が住む山手の町はどこならむ呉工廠のゆたけき煙③

西村陽吉
四賀光子

君たちの過ぎとほり行く道はどここ我はここにゐる確にゐる①

前川佐美雄

キャベツとは何処にも育つ白き玉廃墟広々と水無月の陽に②

川上小夜子

義勇隊隊長として十日ばかりつけし腕章どこに棄てけむ⑤

西田嵐翠

玉章のふみやらむにも亜米利加の何処に君がありと知らなく①

花田比露思

雲母ひかる大学病院の門を出でて頼の我の何処に行けとか

明石海人

霧にぬれたる石だたみ広き内庭に屋根の滴のどこにか音する

松田常憲

(秋風抄)

くぐみどゝ何処にか鳩啼きてゐる朝方さめて母なしと思ふ④

高橋希人

草青む春田とほれば頬白の出てゐるこゑの何処かこもりぬ⑤

中村憲吉

草山にとどく光のたけゆけどこの湖の上はいまだくらしも③

松田常憲

口の中がちやりぢやりするふ快き砂塵の街をせかせか歩いて僕は

渡辺順三

どこへ行こうとする

食って生きてゐるだけそれが生活の全部になった時、どこにも病

矢代東村

人はゐなくなった⑤

荒木暢夫

暮れづきて冴ゆるみ蒼穹や昼の間の賑はひし雲は何処にをさまり

三苦京子

し①

今日も曇り日何処よりとなく降りて来るこの淡雪は降るとは見え

三苦京子

ず①

毛むくぢやらの愛想なきこのわが顔の何処がよくてかくは慕ふぞ

塚田青紀

㊦

剣吊りて帽は破たれどこの兵の寒さにながす涙汁あはれ①
 声かけてこゑの返らぬ夕かも妻よお前は何処にゐるのか⑤
 虚空より遙に放ちし心なれいつかどこよりまたかへり来る②
 ここにその柩はふかく埋めたりあ何処にも父はあらざり⑩

(間歩集)

こころとは内蔵のどこにあるならむ肺も心も透けてあはれ清しき
 この憤りを何処へ投げるか憐寸箱はあまりにも簡素な位置を占め
 てゐる③

この小田の何処にありしと思はるる稗を抱へて人の出でくる

(毎日歌壇)

この大い理念のどこに滲み出でて泪はわれの汗にまざる②
 この夏よどこへおいでと晴れやかにいふ顔付につれて笑った⑤
 このわたり家居は何処ぞ草かりて磯松山に人隠れたり②
 ゴム長靴泥によごしてどこにでもはきゆく雪のくる日も近く④
 再占領のための暗殺ぞどこからともなき日本語放送
 作業強化なんかどこにあるかと思はせるやうに、掃ききよめられ
 た日本鋼管事務所の前。④

作業場のどこにてか打ちし甲高くゆがみきこゆる鉄槌の音①
 さっきの汽船はもう何処へ行ったらうあをい海には錨が浮いてゐ
 るばかり③

さまざまにくるしみしかこの日まで生き来し命重たく思ほゆ⑦
 三光院庭の木影も秋めきて何処にかおこる石きざむ音(多磨)

白井大翼
 松村英一
 桐田藤村
 尾上柴舟

芥子沢 新之介

清水 信

杉本 寛一

白井大翼

西村陽吉

中村憲吉

相良義重

西田嵐翠

矢代東村

小宮良太郎

花岡謙二

岡野直七郎

近藤富一

しあはせはどこにあるのか(しあはせよ) この世界のどこにそら
 にしあはせはあるのか⑥

仕事やや手には馴れたりまんま昼街のどこにか油蟬なく
 死ね死ねといふ不思議なるあざけりの声が夕べはどこからかする

②

死のことは口にせぬ夫墓地を何処に買ふかと或る日事務的にいふ

②

社会生活は流れる流れるどこへ流れるかとても興味がある⑤

十七夜の月の下びによべ鳴きしくつわ蟲のゐるはこの草むら
 書を読むともしびふけてどこよりか首すぢのあたりに風通ふあり

①

白壁のその藍倉も今はなし眉山ばかりどこからも見え⑥

信ぜむとねがひ信じたりとおもひ思へどもこころの何処にか細き
 風吹く

水道栓どこも洩れゐて悲しみのぬぐはれ難き夕ぐれとなる②

すすきの穂朱に出でそめ何処にも落ちつきがたき心と思ふ

寸土なくビル建ち並ぶこの街にどこに生れし蟬か鳴き澄む②

千円をたまはりすなはち酔ひて立ち吹かるるさまにどこを歩きし

⑧

僧堂も何処に隠ると知りがたく一山にわたる大きしづけさ④

そは大変何処でのことかと問い返せば十三ですと言ひたる如し⑥

大洋の波をふせげる岩島の岩どこに松そそり立つ①(玉琴)

西村陽吉

松倉米吉

前川佐美雄

中河幹子

西村陽吉

武田祐吉

村野次郎

四賀光子

若山牧水

渡辺信子

柴生田 稔

村野次郎

高田浪吉

中村憲吉

花田比露思

石樽千亦

竹村に風懸けば家の内のどこにゐても立居の落着かぬなり①

ただ一滴おとせし思惑何処まで波紋をかきて行かむとすらむ②

戦は何所に起り居らむを思ふこともなけむけだし支那の民④

立消になりかけし恋どこから火焔ったものかと夜も眠れず

誕生日を祝ひてたびし落雁のこの大きな鯛のどこから食はむか⑦

千曲川はどこまで汽車に沿ふならむ夏草深き信濃路に來し

地図の上に何処とぞ思ふ武昌越えてはるけき基地にありといふ君

①

眺望のよき場所どこも危うくて岩らそばだつ断崖き上③

月空にのこれり露のしろじろと野の何処にもおきわたるかな④

月読の光明るし何処やらに歌ふをきけば我が幼な謡うた

つつましく黙せる石よ何処にか聖なる歌の声きこゆとて②

(はたちのうた)

日常聞ける声おもほえて君思へば何処か旅して世にありぬべし⑤

常そこに寝てゐしものを娘よ今はどこにも居らずなりにけるかな

①

つばめさん、どこへ帰るの 待ってくれ、南へ帰るわたり鳥さん

(児童万葉集)

妻と子が日毎来て遊ぶここの庭に今日は吾も来つつくづくしは何

処②

東京に留まるわれら斃るべく何処の野面ぞはなればなれに③

桃源郷は何処にあるか死臭しむ地図を拡げて虚しきときに①

三木アヤ

桐田路村

吉植庄亮

津端修

松田常憲

品田聖平

塚田菁紀

村野次郎

金子薫園

北原白秋

中原綾子

中村憲吉

岡本大無

筒井恒子

上田英夫

窪田章一郎

中城ふみ子

遠き空しろつづきしののめの雲の何処にか秋はうごけり

「どこがおりこう」といへば胸をば叩く孫日に幾度かさせられて

おり⑦

何処か近く水田あるらし曇り日の朝間の蛙鳴く声きこゆ

(新万葉集二)

どこからか黒き貨物車あらはれて枯野の軌道重くとどろく⑦

どこからか忍び入り来て馬追ひがあかりの下に長きひげふる②

どこからかビルの日陰にきてならぶ靴磨くとて垢臭き子ら

どこからどこまでまっくろすぎる鳥さんこのトマトが赤くなった

ら一つあげよう

どこに違和残るとあらね病みあとを起き出でむ気力父の持たさぬ

②

どこに口があるかわからぬこの蟬に何をあたへんあたふるものな

し

何処にゆかんあてもなき春の日を白木蓮の花遠くかがやく①

どこにゐても真面目にはたらけば青空と人の情けはわれに美し

どこの家も皆ねむりたり門かどの灯がこの月の夜の夜ふけににじむ

(豊旗雲)

どこの国のなんの聖のいふことか知らねど俺の背筋につたはる④

どこの国の傭兵かとまかふ笹を背にいたくみすぼらしく銃持ちて

立つ②

どこの子のあぐらむ風ぞ、大みそか、むなしき空のただ中に、鳴

る

金子薫園

松本常太郎

川田とくゑ

四賀光子

水野葉舟

本多シズエ

花岡謙二

川島園子

高村光太郎

立花馨

石田マツ

佐佐木信綱

西村陽吉

斎藤喜博

釈迢空

どこの子も絵紙薦逆しまにひきづりて走るよくみる幼子もまた⑩
 どここの砂丘にもきつと咲いてる。この小さい黄色い花は何といふ
 のだらう。

どここの飾窓もどここの飾窓も男の物ばかり男の国に來しと思ひぬ②
 何処の部屋か赤子のこゑの泣くきけば命生まれて冬はきびしさ

(多磨二)

どこ一つに心執するとなけれども住み古りし家に残さむ思ひ④

どこへ行く自分か夏の停車場の朝庇を霧が流れる

どこへ行ってもあをぞらだ、秋かぜだ、歩けるだけ歩かう⑩

どこへ行っても金の貰えぬいやな日だと亡霊のやうに銀座を歩く

どこへ行っても名所があり伝説があり、古い日本じうるさくなる

④

どこへでも飛べる形に地に乾反り風來る待ちてゐる落葉あり②

どこへゆく誰が來たとのみ感情のなき二三行われの日記は⑦

どこまで赤い花なんだらうと君はいふが僕としてはこれより仕方

がない④

どこまでが日本橋やら神田やら霞たなびく焼野原です③

どこまでが額なりしか顛頂まで禿げし頭を撫でつつ思ふ⑤

どこ見ても、屋根にのぼると大きい被害、台風なんか來てほしく

ない(兒童萬葉集)

どこ見ても妹はあらず初冬の陽は室内にかけりたるかな⑦

どこ見ても店の宣伝ばかりです、宣伝してもききめあるかな

(兒童萬葉集)

前田 夕暮	矢代 東村	朝吹 磯子	吉田 垂穂	長沢 美津	西出 朝風	金子 薫園	花岡 謙二	矢代 東村	村野 次郎	長谷川 銀作	矢代 東村	菊池 知勇	鈴木 康文	岩谷 修	金子 薫園	榎本 美栄子
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	------	-------	--------

どこ見ても昔ながらの山と河戦争などは遠き世のこと
 どこよりか屍臭のにはひするごとく思ひてゐたりまどろみののち
 ②

何処よりも雪高しとふ新潟の來迎寺にてくらす子もあり⑤(浦井)

どこを突かれてもてきば答へるおれ達の被告ら徹底したもの
 持つ明るさだ④

どこを吹く風かと思ひ聞いてゐて妻のやつれを寂しと思ふ

どこを見てもどこを眺めてもまつ白い景色なりもはや絶望となる

③

どこをゆく川音ならむ岩穴の岩にひびきて闇の寂しさ①

なれなれしく言葉かはしてゐるもののどこの馬の骨とも互にわか
 らず①

ぬくぬくと朝日障子に照りくれば何処にゆかむ今朝はあてもなし

(新万葉集五)

熱線に融けしガラスと眼には読め何処にむきて声は放たむ②

ねむりの寛容さ人情的な重さもなくなって遙かに何処へか還る⑥

白鳥は目に慣れしかどこの朝や黒きスワンの濠に泳げり⑦

端境の秋とおもへどこの街の配給は途絶え早や七日八日

嘴と脚と黄なりし異郷のシーガルら何處ぞ照明に更くる夜の淵②

八年前の今のわが妻の手紙の束何処に藏ひしかと氣にかかるかな

(悲しき玩具)

花しろき梅の林のひる曇り何処かととふ日のありどころ⑦

津端 修	山崎 一郎	岡 麓	矢代 東村	津端 修	前川 佐美雄	野沢 柿葺	荒木 暢夫	田中 喜和人	大岡 博	斎藤 史	岡野 直七郎	中村 正爾	中河 幹子	石川 啄木	尾上 柴舟
------	-------	-----	-------	------	--------	-------	-------	--------	------	------	--------	-------	-------	-------	-------

腹へれば何処か飯屋に入るべくいくら探せど見当らぬかな

はるかにも風に乗りゆく火山灰何処の辺まで運ばれゆかむ②

春の夜も雨とどろけり部屋にぬぬ父は何処に行きしかと思ふ⑥

晴れし夜の何処の雲よりちる雪ぞなにか話さねば寒さ身に沁む①

(新万葉集一)

氷雨にも心を誘ふひびきあり何処にも人の友の在ること②

ひた歩む道のはげしさ行きゆけど何処までつづくこの一つの道④

一ところ末枯茅原花あかるし何処より来てつくる菜畑ぞ①①

人におされ牛込見附に出でし我れ何処にゆくとあてなかりけり

(新万葉集九)

ひとりにて寂しきときは何処へ行く庭に出て見る栗の木と空

百貨店にも何処にもわれの随きゆかぬこの年のくれを妻は言ひ

づ①

午真中越ゆる杉森昏みつつ何処より散り来る吉野桜は①

灯を受けて光る破片の小さきが今宵路面の何処にも見ゆ①

ピンクの皮膚温さうな兵何処のジョンか行きすぎて如何ほども憎

めず①

吹く風の吹き絶え間にはららと何処の花ぞもわが庭に散る

ほど近き浪の音にもまぎれず何処か知らね松虫の鳴く③

君を刺し死なんとぞ思ふ何処まで沈む心ぞあがる心ぞ①①

水のごとくこころかよひぬ何処にか在りてよろしき露立てる湖①

八百屋もの重きをさげてゆきなづみ立てる女よ何処まではゆくぞ

川島サダ

長沢美津

宮格二

荒木暢夫

照井親資

朝吹磯子

尾上柴舟

和田茂生

津端修

鈴江幸太郎

市川敦子

葛原繁

中城ふみ子

林圭子

中原綾子

與謝野晶子

斎藤史

高村光太郎

夕やみに玉なし群れて舞ふ虫の何処にか去りて静けくありけり①

夢に見し今のはどこの子なりけむ死にしわが子とはすこしちがひ

し①(現代短歌全集)

呼びかけつつ運ぶ前シテの声のうちわれは何処より何処へゆくや

②⑦

夜の二時を風呂にわがをれば靴の音いまごろ帰るどこの良人か

よろこびなぞどこにあるかといふ顔だ青い作業服で植木もつて

⑤

りゅうとして歩きをるひとばかりなり貧しき人はどこにをるらむ

①

臨終の母が言葉の何処よりか旅舎のはしらに倚ればきこゆる①

労働者にあまりに秩序がなさ過ぎると説けりと聞けど何処も変ら

ず①

わがあげしみ灯は何処につくならむ暗きにならぶ万灯見をり

天く死ぬところが今も湧いてきぬ薔薇の匂ひがどこからかする①

わが靴を磨かずなりし家妻き不満ならねどこの頃思ふ(毎日歌壇)

吾が工員何処を歩く眼の前を列行き列来り遂にわれ倦く①

わが道は何処にもなしこれの世のこの混濁の中を貫く①

丘の上の木立のどこに啼くならむこゑなきつげり一つ梟①

小瀬溪にこの松山はつづくといふ松の葉光りどこまでも松の山

男といふ男女といふ女ひしめきわめき隊伍ととのへ何処にゆく④

豊島晃

大悟法利雄

土岐善磨

安成二郎

西村陽吉

三苦京子

森園天涙

土岐善磨

鈴江幸太郎

前川佐美雄

橋爪啓

千代国一

都筑省吾

大場寅郎

片山広子

米田雄郎

不変、永遠の意をそえる。

一日一日梢明かるむ桜花常臥す母の視野をうず(づ)むる
夢にたつ常をとめ子は瑞みづと花の十字架を負ひつつ来たる
常みづく黒き砂地に群りて或るところには杉菜秀けたり
岡井 隆
加藤 知多雄
岡部 文夫

(杉菜―道ばたや荒地に生える草。針金状の緑色の茎の節ごとに、輪のように枝を出す。「つくし」は、杉菜の胎子茎。)

とこあげ【名詞】「床上げ」

①大病が全快して寝具を片付けること。また、その祝い。とこばらい。②お産の後、

子の病癒えてうれしも床上げて広くなりたる部屋掃きて居り

(新万葉集三)

床上げて掃除すみたる病室のひろき畳をともしみ坐る

どこう【名詞】「土工」

①(「土工」とも書く)土の切り取り・盛り土・運搬など土砂を扱う土木工事。②土木工事に従事する労働者。土方。

朝まだき焚火を囲む土工らの顔が火照りぬ親方はまだ③

いまここに土工夫として働けど明日は兵服着て発つらむか

薄暗き土工人夫等の室に入り差別なき昼餉の刻をたのしむ

(朝日短歌一)

埋木を掘り出す土工砂青きこの地の底に焚火して寄る⑤(角河文庫)

川音なす岨の土工の午休み土かわきつつ山の日しづか(私編)

枯柳も芽ぐむ日さしのあたたかさ土工の額に汗が流れる④

黄のもみぢ背景として見つつく土工苦力が電築くさまも②

久保井 信夫
堀 尾 恒
平 沢 正雄
近 藤 芳美
白 井 大翼
西 村 陽吉
山 本 友一

暗きより両肌ぬぎて土を堀る村の誰彼土工になりぬ
コツペパンの囁る土工のまだ若く傍行くわれに敵意を示す②
砂利担ふ土工らの肩の力瘤汗に光るを見て帰り来ぬ①
砂利運ぶ土工らは如何に見るならん橋の上より眺むるわれを①
唯一人土工にまじり砂利を敷く戦争寡婦と聴くもいたまし
煙草火を借りてゆきたる土工らの越え消えて峽に闇は来襲ふ⑩
朝鮮の旗立つる一団は土工らかしみじみと吾が声かけたきに②
塵埃炉海の暗きに匂ひつつ働く一日土工らとあり⑤
手ぬぐひ肩に印ばんでん一まいの土工も山から町へと帰る④
土工等が寄りて焚く火のぬくもりにほのかに触れて道ゆきにけり
土工らが声をあららげある山に発破のすぎし火薬がにほふ③
土工等は冬ごもるらし坂下のバラックいつか薬囲ひせり

(新万葉集七)

トロッコの車輪快調に鳴る急勾配土工石のごとく疾駆し下る

半数は入墨したる土工らの話卒直に通ふものあり④

ながながと土掘りすすむ土工人引揚げ人が語の下卑ず⑫

半数は入墨したる土工らの話素直に通ふものあり④

額に垂るる汗をぬぐはず土工らは赤きトマトにかぶりつきたり①

人むれは流れるながれる土工たちが石掘る道にかたよりあふれる

昼餉終り寝転ぶ土工間を置かずすこやかさうな鼾が聞こゆ③

昼飯を木にぶらさげて土工らは霜白の川原に降りてゆきたり

(朝日短歌)

結城 哀草果
山崎 一郎
久保井 信夫
久保井 信夫
青柳 琴代
木 俣 修
近藤 芳美
近藤 芳美
西村 陽吉
川端 千枝
結城 哀草果
平山 松風
松川 亀森
鈴木 康文
尾上 柴舟
鈴木 康文
久保井 信夫
大熊 信行
久保井 信夫
佐田 朝雄